

本年度京都文科大學哲學科卒業論文

(△あるは撰科)

◎毎年一回開かるゝ『アメリカ心理學會』大會の第二十四回は昨年(一九一五年)十二月二十八日より三十日迄の三日間、シカゴ大學で行はれたが未曾有の盛會で其處で發表された諸種の論文は實に七十を算したと言ふ事である、右七十の論文中、精神測定に關するものが最も多數を占めて二十二、次は實驗心理學に關するものが十三、それから動物心理學及教育心理學に關するものが各々八、普通心理學に關するものが七、社會心理學、變態心理學に關するものが各二、其の他は何れも心理學と科學、哲學教育學等との關係を論じたものであつたと言ふ。そうして講演場のすぐ隣りの室には諸々の器械を陳列して參會者の興味を大に煥起したと言ふ事である。

◎又アメリカに於ける『哲學心理學南方學會』も其の第八回大會を丁度其の頃(十二月三十日)オハイオ州大學で開催したと言ふ。

◎露都ペテログラード、大學教授、イワンパウロフ Iwan Pawlow(六十七歳)及、獨逸ブレ斯拉ウ大學教授にして且つ、Zentralblatt für die Gesamte Neurologie und Psychiatrie の記者たりしドクトル、エ、アルツハイマー Dr. A. Alzheimer(五十二歳)は何れも此程逝去されたさうである。

◎本年六月十九日より全二十三日迄の五日間、シカゴ醫學會主催の下に、精神病學者や神經學者の會合が同市で催され、精神薄弱者に關する問題に就て多く論せらるゝ筈である。

哲學

認識對象問題の論理的發展を論ず

自由

印度哲學史

起信論哲學基礎概念之研究

眞言密教思想發達史論

因明眞立研究

シヤンカラ哲學

淨土他方教に於ける世親親鸞の交渉

古三論の研究

支那哲學史

管仲の重なる思想

周人の家族的並に社會的生活

伊藤仁齋の哲學思想

禮學に於ける鄭王二氏の異同

心理學

想像に就いて

倫理學

道德的自我に就いて

岡野留次郎
篠原 助市

横 田 眼 互

鳥 越 孫 三

松 尾 誠 禪

松野尾慈潮

△奈 波 諦 觀

△野 上 準 爾

佐々木 慧 晉

加 藤 盛 一

高野久太郎

佐 藤 廣 治

朝 日 直 樹

野 崎 泰 秀

Charity

教育學教授法

公民教育

ケルシエンスタインの教育説

僧堂の制度と教育の理想

農村の學校を論ず

美術美術史

寫實主義

宗教學

信を論じて知との關係を觀る

社會學

輿論進働の基礎としての感情論理の研究

社會事業の研究

京都哲學會例會

四月二十九日午後三時より文科第九教室に於て開催左の講演があつた。

●自由意志に就て

文學士 楠見 尙文君

自由意志の問題は大問題であるが、先づ自由と言ふ意味から定めねばならぬ此の意味は頗曖昧であつて種々の混同を來すのであると思ふ。ヘーレンゲス、ラッシュニードル氏が其著『The Theory of Good and Evil』中に説く處は自己決定論 Self-determinism なる名の下に一種の自由意志を説けるものなるが、今其の一斑を紹介すれば、氏は道德の第一假定として行爲の原因としての自我

松岡 文七

西居 靈證

神代 建世

柳原 舜祐

末永 惣太郎

須田 國太郎

深 山 徵

田 村 惠 寛

△篠 田 靈 音

の存在することを認め、自由に三種の意味ありとし、自由なる行

爲とは(一)理性に従ひてなせる行爲、(二)自我より起る凡ての

行爲、(三)單に非決定的選擇より、起る行爲を言ふものなるが、

以上の三つの中、第二の意味の自由は道德の絕對的本質的假定と

心理學讀書會

五月四日午後六時半より心理學實驗場演習室に於て開催左の講演があつた。

● A physico-chemical theory of memory

ドクトル、オブ、フイロソフイー 神田 左京君

神田氏の講話は人間の生理學的祖先は何ぞやの問題から始まる人體を構成するONHCS等、十八乃至十九種の元素それ等の化合が蛋白質、含水炭素、脂肪、水、鹽類等をつくる。人體も亦是等の化合物の複合よりなる極めて複雑なる化學的物質に外ならぬ。

尋で問題に記憶の概念決定に移る。鐵線 C hysteresis & etching-cil の auto-oxidation などの時間的経過を示す Curves が Swift,

Book等の研究にかゝる諸種の Learning curves と其の形状の類似する事より推して記憶を Retention of Experience なりと定義し、獨り人類等に於てのみならず、廣く生物界、無生物界を通じて行はるゝ一般の現象であるとした。人體が既に一種の化學的物質であつて記憶がかくも一般な現象であるとするれば、Hysteresis に於ける Ewings Theory の様な器械的説明が、人間の記憶の場合にも可能であるかと思はしめる。

神田氏は記憶の起る原因の二作甲をあげる、其の一は或る化學的變化が腦の物質に生ずるに在り、其の二は其等の間の連絡作用である。

前者に於て氏は先づ Robertsd 教授 (University of California) の學説を紹介した。

氏は記憶を以て何等かの刺激によりて腦裡に生ずる一種の化學的物質なりとし、其場合の化學的變化は大體上 Law of Anticatalytic mono-molecular chemical Reaction 即ち $\frac{dx}{dt} = k_1(a-x)$ に支配せらるゝものとみる。加之此の法則を Ebbinghaus の記憶研究の結果に適用して大差なきを得たと云ふ。

然らば其の化學的物的とは何であるか。R氏は此れに就て明言しては居ないが、神田氏は Reinke 一の他の研究の結果より推して、多分乳酸 $C_3H_7O_2$ 又は炭酸 H_2CO_3 であらうと斷じた。

以上は氏の記憶學説の化學的方面である。こゝに後者の説明は其の物理學的方面を形成する。

諸種の刺激に應じて得た印象——氏は以て乳酸であらうといふ——相互間の連絡はいかにして生ずるであらうか。氏はこれが

就て説く處は、Erner のそれの如く Bahnung によりて抵抗の減少する事であるとす。而し、記憶に關する從來の學説を一括して Voltery なりとして捨て去るであらう神田氏はかくの如き説明によりては満足しない。連絡の甲にあたるものは所謂 association fibre であるとし、更に Bernstein 等の神經纖維の電氣的分極作用説をかり來つて此の作用を説かうとする。

如斯一方に於ては、化學的物質の成生他方に於ては電氣分極状態の變化、かくして成立した經驗の保持は如何にして説明せらるるであらうか。この保持こそは記憶として記憶たらしむる所以の中幹である。然るに氏はたゞ類例を以て是れを説く。曰く、彼の創痕癒えて其痕跡永く存するが如く然りと新陳代謝瞬間も息まざる四に於て、如何にして一定の化學的物質や、一定の電離状態が保存せらるゝのであらうか、吾人は此の點に就ても、的確なる科學的説明を要求してやまぬ。大きな期待を以て其説の發表せらるゝ日を俟つものである。

新著紹介

生物學と哲學との境

東京帝國大學醫科大學教授醫學博士永井潜著。大正五年四月。東京西肆洛陽堂發行。菊版六六二頁。定價三圓八拾錢。

著者右一本を下名に寄せて批評を求められた。然るに時恰も本誌編輯締切の際なりしを以て、之を精讀して本誌本號に愚見を述